

109 學年度第一學期 Eurasia 基金會國際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」(8)

議題：日本の服飾とアジア交流の相関研究—江戸時代の更紗を例に—

第8回 Eurasia 基金会国際講座は、国立故宮博物館南館院處典藏研管科助理研究員兼科長黄韻如博士を招き行われた。黄博士は更紗に関する貴重な写真を多数持参し、解説しながら学生に鑑賞させてくれた。講演は更紗の定義、日本の服飾文化への影響、「名物裂」、史料価値について、また日本の更紗から院藏する東南アジアの織物などを見るといった内容だった。

一、更紗の定義と工芸

更紗は日本起源の名詞で、16世紀末から18世紀にかけて、外国船によって日本にもたらされたインド絵染木綿に由来する。当時のインド絵染木綿は世界中で流行し、日本、スリランカ、タイ、ミャンマーなどアジア各地で、後にはヨーロッパでも売買された。インド絵染木綿の染料は主に茜草染、藍靛染で、明礬、鉄漿、草木灰などの媒染剤および臘防染の二種の技法を巧みに用いたところに工芸上の特色があり、染絵によって各種深淺多彩で豊富、彩鮮やかな更紗を生み出した。しかし、その後染めずに、木板壓印の手法を使用発展させた。

二、更紗が日本の服飾文化に与えた影響

日本の最も早い記録はイギリス東インド会社の船長 John Saris (1580-1643) の『日本渡航記』で、江戸慶長18年(1613)平戸に到着し、平戸藩主にインド木綿と更紗を贈呈した。その後更紗、大巾更紗などの輸入によって褒美を得た記載がある。寛永10年鎖国時代に入ると、各種の華美な更紗は常に献上物だったことが記録からわかる。更紗の輸入は日本の染織技術を大いに飛躍させたが、当時の史料の記載によると、その頃の日本の更紗の付着性は良くなく、洗浄すると簡単に色落ちした。そこで更紗は日本の防染技術にも影響することとなった。日本の近世染色技法には絵染(手描き染)、絞染(辻が花染)、鹿胎染(鹿の子絞り)、防染(友禅染)等がある。

黄博士の説明によると、「着物」は江戸時代に「小袖」と呼ばれていたが、明治時代に西洋文化が大量に流入し、日本の服飾を外国の服飾「洋服」と区別するために「着物」と呼ぶようになった。友禅染の由来となった宮崎友禅齋は江戸前中期に京都で活躍した扇絵師で、花鳥画や源氏物語の貴人画を得意とした。後に染料に応用、発展させ、高雅で華美な小袖模様を描き出した。

三、「名物裂」から「更紗」へ

外来の染織物の輸入は日本の織物文化や技術にきわめて大きな影響を及ぼした。南宋、元、明は中国の大量の布料を伝え、またインドの更紗を広めた。南宋、元、明の織物は貴族や武士の服飾、室内装飾として、その身分、地位、富貴を表わした。日本の茶人は特に中国舶来の織物を珍重し、書画の表装や茶器を包むのに用いただけでなく、収蔵し賞玩するようになった。その茶碗の外箱を包む風呂敷も更紗が使われた。江戸中期にはそれを整理、分類するようになり、「名物裂」と呼ばれるようになった。「名物」は有名、得難いものという意味であり、「裂」は断片、残片である。主に大名、貴族、茶人などに用いられ、文化の涵養と蘊蓄を表わすようになっていった。

四、日本の更紗の史料価値

当時の一般庶民は貴重な布を持つことはできず、画集で鑑賞するだけだった。そのため『佐羅紗便覧』『増補華布便覧』『更紗圖譜』などの画集が登場した。後期には更紗の模造品が現われ、「和更紗」と呼ばれたが、日本では天然染料が手に入れにくく、インド更紗の紅色を出せなかった。江戸幕府による鎖国後、多くの「端物切本帳」が残された。

五、日本更紗から見る院藏の東南アジア織物

黄博士は、更紗の作業の意味や役割を研究することは院藏品の比較対照に役立つと述べる。博物館の仕事で重要なことは、院藏品の年数、名称を定め、品質を鑑定したりすることである。日本文化の中で各種の更紗帳冊は比較的系統的に整理保管されていて、比較対照研究する上で大変に参考になる価値を持っており、以上の例の比較考察を通して、院藏する東南アジアの織物の研究を進めることができる。

最後に黄博士は博物館の仕事が文物研究、展覧会の企画、展示品の手配、宣伝販売にあることを述べ、学生たちには興味と語学的強みを一つにして、博物館とつながりを持ってくれるように激励し、また故宮への参観を歓迎してくれた。

(Web サイト:<https://Eurasia.pccu.edu.tw/faculty.php>)

(原稿:陳毓敏・日文系副教授)

(日本語訳:塚本善也・日文系副教授)